

**【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 3章12～17節**

12あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。13互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。14これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。15また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。16キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。17そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

**【福音書日課】ルカによる福音書 15章11～32節**

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18ここをたち、父のところに行ってみよう。』19「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。』

23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。

26そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を聞いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

## 「あなたを見つけた！」【こども説教のために】

今日も皆さんを「神の国の食事」にお招きしましょう。皆さんには、この席にふさわしい良いものを身に着けていただきます。最高のごちそうを用意しますから、一緒にいただきましょう。皆さんがおいでくださったのですから、わたしたちは、神の御前で、主イエスと共に祝い、楽しみ喜ぶのです。

主イエスは、誰もが招かれた食事の席で、たとえをお語りくださっています。ある人に、二人の息子がいました。弟息子は、父親から財産の分け前を受け取ると、家を出て行ってしまい、遠い国で、無駄遣いをして、何もかも使い果たしてしまいました。ところが、運悪く飢饉が起こって、食べるにも困り始めます。人を頼って豚の世話をする仕事にありつきましたが、食べられるのは豚の餌と同じものばかりです。我慢できず、思い切って父の家に帰ることにしました。財産を無駄遣いしてしまった息子でも、裕福な父ならば雇人の一人として迎えてくれるでしょう。ところが、彼が帰ってくるのを見つけるなり、父親は彼のもとに走り寄り、抱いて喜び、帰ってきたことを祝う宴会を始めたのです。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」と、父親は言いました。

この父親のように、天の父である神は、わたしたちがどんなに背を向けたとしても、ご自分の「神の国の食事」にお迎えくださるのです。

## 兄も放蕩してみる!?

今日は、皆さんに、このようにご挨拶すべきかもしれません、「愛する放蕩息子、放蕩娘の皆さん」と。聖書に親しんでこられた方なら、きっと、主イエスの教えの中でも飛び切り愛すべきこのたとえ話、「放蕩息子のたとえ」を知らぬ者はないでしょう。もしも、まだ教会においでになられて数年の方、聖書に親しまれていらっしゃる方があれば、ぜひ、今日、主イエスがお語りくださった「放蕩息子のたとえ」を、まず繰り返し味わっていただきたいと思います。長く信者としての生活を送って来られた皆さんの多くが、このたとえ話によって、安心して神のもとに立ち帰られているのです、「わたしも、この放蕩の限りを尽くした弟息子のようにでした」と。

もっとも、何でもない日曜日にも欠かさず教会においでになり、礼拝を続けられている信者の皆さんの中には、このたとえ話に描かれている兄息子のよう、少し拗ねた思いを抱いている者もあるかもしれません。そういう方も、もちろん、兄息子に語りかけた父親の言葉を心に留めて、教会の弟息子たちを責めたりは、なさらないでしょう。ただ、教会の兄息子たちは、心のどこかで考えるのです、「自分も、ときには弟息子のように、父のもとを離れて無駄遣いしてみようか」と。「そうしてみれば、父がどれほど愛してくれているのか、自分も実感できるかもしれない」と。

確かに、そうなのです。今日もここにいらっしゃる多くの教会の仲間たちがいます。彼らは、「弟息子のように、天の父のお与えくださる大きな恵みは無駄にしまっても、何もかも失ってしまっても、帰ってくれば、天の父は必ず諸手を上げて受け入れてくださる」とすっかり安心しています。クリスマスやイースターになれば、あるいは葬儀には、帰って来られるでしょう。わたしたちは、そういう仲間たちを歓迎します。信者であろうとなかろうと、教会に帰って来られる方を、天の父と共に歓迎するでしょう。

だから、どうぞ安心して「放蕩」してきてくださいと、皆さんに申しあげてもよいのです。兄息子を自認する皆さんも、一年に一度くらいは、そっと黙って、日曜日の朝、他のところにお出かけになられてもよいでしょう。他の教会でも、教会ではないところでも…。そして、そこからもう一度、心の向きを直して、つまり悔い改めて、戻って来られれば良いのです。

けれども、「そんなご都合主義の悔い改めてよいのか」と思われる方もあるかもしれません。「悔い改めは、もっと真摯なものであるべきだ」と。しかし、「たとえ」の弟息子は、真摯に悔い改めたわけではないでしょう。憐れみ深く、恵み豊かな父のもとに、何と言いつすれば戻ることができるか、ということをあらかじめ考えて、父の家に向かったのです。それでも彼は、父に受け入れられました、無条件で、しかも、大歓迎の宴会をもって。

## 父の無駄遣い

宗教改革者の M.ルターは、主イエス・キリストが「信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになった」（「95 箇条の提題」1 項）としても、「真実に悔い改める者は稀である」（同 31 項）という現実を見ていました。わたしたちの神に対する姿勢は、それほど当てになりません。主イエスも、そのことをご存じだったのでしょ。

ただ、そうであれば、そして、それでも御手の内に抱いてくださるといふ天の父を当てにして、安心して生きていけばよい、ということだけをお教えるのであれば、「放蕩息子のたとえ」の最後の部分、宴会に加わらずに不貞腐れる兄息子に父親が語り掛ける場面は、不要だったのではないのでしょうか。

今日は、旧約聖書日課（創世記 37 章）の朗読を省略しました。その日課箇所は、「ヤコブ物語」の後半、いわゆる「ヨセフ物語」の最初の章です。皆さんには今日、ぜひ「創世記」を読み直して見ていただきたいのです。すぐに気づくことですが、「放蕩息子のたとえ」を手の込んだ短編小説のようにお語りになられた主イエスは、まちがいがなく、あのアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヤコブの息子たち四代の家族の物語（創世記 12～50 章）を読者に思い起こさせようとなさっているのです。

アブラハムには、イシュマエルとイサクという異母兄弟の息子がいました。イサクには、エサウとヤコブという双子の息子がいました。ヤコブには、10 人の兄息子と、その兄たちに疎まれた末の弟たちヨセフとベニヤミンという息子がいました。父親たちは皆、息子たちのことで思い悩みます。彼らは皆、一度は息子たちの誰かを失う経験をしました。ヤコブは、兄エサウと骨肉の争いをして、一度は父の家を離れた息子でしたが、その兄と和解し父の家に戻ってきていました。そのヤコブが、今度は、息子たちの一人、末の弟たちの一人、ヨセフを失おうとしていました。息子の立場であったヤコブが、今度は父の立場で、息子が失われたことを嘆く者になったのです。

息子たちは皆、時を経て、自分が父になるのです。父として、息子たちを、どこまでも愛し尽くす者となるのです。父となった者は、息子たちの立場にある者の思いをも知っています、息子たちが父の思いを知らぬままでも。

「放蕩息子のたとえ」で、主イエスは、兄息子に父親の思いを聞かせます。父の立場を知るようにと願うのです。息子たちが、いずれ、父の立場になってほしいのです。だから、父の思いを知っておいてほしいのです。人の家族でそうであるように、「神の家族」の息子たち娘たちには、天の父の、子らのためには恵みの限りを尽くそうとされる思いを聞いてほしいのです。恵みを無駄遣いする子らのために、なお恵みを尽くそうとされる天の父と同じ思いで、互いを見てほしい。そう、主イエスは呼びかけられているのです。